

栃木県建築士会 創立70周年記念講演会 塩田理事長が「大谷石 未来へ」スライドショーにて熱く講演

NPO法人大谷石研究会 理事 宇賀神 史芳
(楓建築工房)

(一社) 栃木県建築士会(柴田道夫会長)が創立70周年の記念講演として、NPO法人大谷石研究会の塩田潔理事長を迎え、今回刊行した写真集「大谷石 未来へ」と題し、去る3月17日(金) ライトキューブ宇都宮において講演会を開催しました。90名の参加者には、記念品として「大谷石 未来へ」が配布されました。会場は大谷石をふんだんに使った隈研吾氏が監修した建築であり、まさに今回の講演に相応しい場所設定でした。塩田理事長は、掲載された60件をどのように厳選したか、また小



会場風景



熱く語る塩田理事長

田原文化財団江之浦測候所や自由学園南沢キャンパス等の大谷石の使い方の魅力等を約90分に渡り、スライドを見ながら熱弁を奮いました。講演後、「大谷石の組積造(石蔵等)の建築許可は可能なのか?」とか「栃木県以外の都や県で石堀が壊されていく事、何か対策はないですか?」等の質問もありました。また後日談ではありますが、「講演も写真集も良かったです。2500円はお値打ちですね! 3500円以上の価値があるのでは!」などの感想が寄せられました。



西側広場から見るライトキューブ宇都宮

新興の十和田石から学ぶこと

NPO法人大谷石研究会 西山 弘泰
(駒澤大学文学部地理学科 准教授)

2023年3月19〜20日、秋田県大館市において十和田石を採掘する中野産業(株)に伺いました。同行者は、私と三浦魁斗会員、宇都宮市職員の吉野清史氏の3名です。十和田石の正式名称は「石英安山岩質浮石質凝灰岩」と言うそうです(写真1)。大谷石と同様に約1000万年前の海底噴火による火山灰の堆積によって生成されました。掘り出したときは美しい薄青色を呈し、空気に触れると酸化作用によって次第に白や薄茶色に変色します。また、大谷石のようにミンと呼ばれる部分も存在します。大谷石との違いもあります。比重は2.1g/cm³で、大谷石の1.6g/cm³に比べると重く、比較的頑丈です。そのため、切り出した断片の感触は滑らかで、伊豆石の二



写真1 十和田石の標本



写真2 採掘場入口での参加者の集合写真



写真3 採掘場内部と採掘の様子

種である若草石に近い印象です。十和田石が発見されたのは、戦後になってからでした。地質調査で良質な凝灰岩の存在が明らかになり、創業者である中秀男氏が、友人からの誘いを受けて1973年より採掘をはじめました。中野産業の事務所から南東に300mほど行った場所に採掘場の入口があり、すべて坑内掘りによって採掘されています(写真2)。坑内の採掘地点までは、緩いスロープになっていて、トラックも入坑することができず、採掘方法は、まず垣根掘りによって横方向に掘り進め、その後、下部に掘り下げていきます。採掘機は、大谷石で利用されているものと同じです(写真3)。また、最終的に下部にタガネを打ち込み、ハンマーで剥がす工程も大谷石とよく似

ています。比較的近年採掘・利用がはじまったことから、採掘地周辺に十和田石に関連した文化・景観は全くありません。近年、地場産材として大館市役所や比内総合支所、入浴施設などには利用されていますが、地域資源としての認識は薄いのが現状です(写真4)。そのため、十和田石の主な消費地は、地元ではなく、全国各地に分散しています。十和田石の代表的な利用方法は、温泉施設など床や壁面などです。風呂の床材に利用されるのは、十和田石がもっている「濡れても滑りにくく、落ち着きのある青色を放つ」という特徴からです。また、大谷石同様、多孔質であるため、吸着性や脱臭・保温・保湿効果に優れており、内装材などにも利用されています。特筆すべきは、採掘や加工の過程で出た端材や粉、加工での過程で出た廃水の利用が徹底されている点です。十和田石に含まれる豊富なミネ

ラル分は、有用微生物の増殖を促し、土壌改良材や農業用資材などとして有効であることがわかっています。中野産業では、端材を専用の設備で粉砕し「ヒナイグリーン」という名称で土壌改良材などとして販売しています。また加工時に出た廃水もろ過し粉を採取しています。以上のような取り組みは、新興の石材業者であったが故の知恵や努力だと感じました。石の活用方法は、必ずしも建築用材だけではなく、まだまだ未知の可能性が広がります。常識にとらわれない、中野産業の取り組みは、大谷石にも大いに参考になることとします。



写真4 壁面に十和田石が使われた大館市役所本庁舎の入口

会員通信

JIA 栃木クラブ賞に 「大谷石 未来へ」を提供いただきました

NPO法人大谷石研究会 理事 武井貴志
(公社) 日本建築科協会栃木地域会代表

本建築家協会栃木地域会(JIA 栃木クラブ)では、県内の建築関連学科卒業生に向け、学生生活の集大成である卒業制作作品に対して、JIA 栃木クラブ賞を設けています。今年で39回目。宇都宮メディアアーツ専門学校1階ロビーをお借りして開催しました。JIA 会員の建築家坂根研介氏をお招きして、講演をいただきながら特別審査員として審査にも参加いただきました。出展された学生には例年、陶芸家谷口勇三氏の作品を副賞として手渡していますが、今回は研究会のご好意により「大谷石 未来へ」も贈ることができました。学生がJIA 栃木クラブ賞に参加するには二つの方法があります。ひとつは学校推薦、建築関連学科を有する県内3大学(宇都宮、足利、小山高専)からそれぞれ2作品計6作品。もうひとつは公募、学生が自主的に応募し選考会を経ての参加、こちらは専門学校生の作品も含まれます。推薦と公募ではテストに若干の差異があり、学生と先生方の考えの違いを推し量り、毎年楽しみにしていただいています。作品の内容は、日々の社会情勢を反映していたり、地



栃木クラブ賞に出展した9人の学生と、特別審査員の有坂氏。担当教員教授とJIA 栃木クラブの会員。毎年一枚ずつ増えてゆく記念撮影です



大谷石 東西南北

大谷石で丹念に焼き上げる

NPO法人 大谷石研究会 広報担当 平沼 隆志

大谷石の釜で焼き上げるモノといえば、ピザしか知らなかった。ところが、最近「大谷石の焼釜でたんねんに焼き上げた」せんべいと出合った。埼玉県鴻巣市のメーカーが直販、卸売りのほか通販でも販売中。言い換えれば、大谷石で焼いたせんべいを各地の人が味わっている。ネット検索すると、東京・葛飾区にも大谷石の焼釜を使う手焼きせんべいの店がある。千葉の県立博物館デジタルミュージアムによると、房総地方の名物「鯛せんべい」は「銅の型に生地を流し、大谷石の釜で焼く」。大谷石は「食」の分野での可能性ももつとあるのではないかと。大谷石で焼いた焼きギョーザなんて面白そうなのだが……。

